



探究的な学習研究推進通信

Fukutomi Inquiry Learning Team



令和4年
5月13日
(金)

No.11

「探究的な学習の在り方に関する研究推進地域事業」2年目のスタート！

4月に新たな職員を迎え、新体制の福富小・中学校がスタートしました。今年度は「探究的な学習の在り方に関する研究推進地域事業」の2年目です。本研究は3年計画で行われる広島県の事業です。来年度の秋に発表することを考えると、今年度の研究内容が発表のメインになります。新しく赴任された先生方は、どんな趣旨で行われるのか、どのような活動を目指せばよいのかなど、疑問がたくさんあると思います。年度の始めでもありますので、初心に戻ってもう一度確認をしてみましょう。



本事業の趣旨は、「PBL (Project Based Learning) の考え方を参考に、小・中連携型の生活科・総合的な学習の時間の単元を開発、実践し、その成果を検証・普及する」です。PBLは「授業での子どもの学びをプロジェクトとして組織し、その達成へと促す手法」であり、実生活・実社会の「答えがない問い」を扱い、その解決に向けて探究し、解決策を社会に提案・発信することで、児童・生徒の主体的、対話的で深い学びを引き出そうとするものです。昨年度の研究推進のポイントは「Doの充実」とにかくまずはやってみよう！というものでした。今年度は、「本物の探究」です。昨年度の研究を生かして、「本物の探究を目指し」、教職員自身も探究をしていく必要があります。子どもたちはもちろん、私たち教職員もワクワクするような「本物の探究」を目指して、研究を進めていきましょう！

具体的にやるべきこと

○中学校区として系統的に育成を目指す資質・能力を設定

○PBL(プロジェクト型学習)の考え方を参考に、生活科及び総合的な学習の時間の単元を開発・実践

○開発単元で設定した資質・能力を評価するためのルーブリックを開発・使用・改善

○3年間の研究成果を域外に普及するためのリーフレットを作成

第1回探究的な学習の在り方に関する研究推進地域連絡協議会

5月9日(月)に、「本物の探究」を生み出すためのアイデアを創出するために、教育センターにて協議会が開催されました。(研究推進リーダー以外はオンラインで実施されました。)早稲田大学 教育・総合科学学術院 教育学部 藤井千春 教授に「子どもが中心にいる探究とその構想～「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて～」という題で講演していただきました。

1. 知識基盤社会における学びの原理

知識とは、「新しい価値(例:SDGsなど)」のことで、今はその創造が求められる時代です。

＜考え方・倫理, システム・制度・法, 技術, 活動など＞

そのため、多様な個性の協働(collaboration:違うものが組み合わさる)が必要です。＜※協同(cooperation:同じものが集まる)とは違う。＞1人では実現できない課題を、多様な個性が組み合わさって、みんなが納得のいく「最適解」＜手段, 方法, 理解など＞を構築していくこと→これが探究！

協働的探究に参加・貢献できる力こそ、この時代の児童・生徒に育むべき資質・能力である。＜これからのリーダーシップは、カリスマ性を発揮して引っ張るのではなく、みんなを巻き込んでそれぞれの個性を生かして、みんなが納得できる「最適解」を求めることができる力になる。＞

2. 「主体的・対話的で深い学び」が成立するための条件

主体的な学び: 自分の言葉(※重要)で自分の体験に基づいて語る。自分の言葉で五感や感情を伝え合うことで、子どもたちが課題を自分事としてとらえ、目をキラキラさせて、いきいきと活動するようになります。前提として、集団が自由に意見を言える場であること、自己開示が必要です。

対話的な学び: 聞いて一緒に考えて発展するように応答する。発表者を助けるような支援的な聞き手を育てます。(※教師が支援するのは発表者ではなく聞き手)発表者が自分の言葉で語っていると、周りの子どもたちはよく聞いて、自分の言葉で応答するようになります。集団の全員が「自分事」として活動するように、「つぶやき」での反応を尊重する必要があります。課題の中心に迫るような「つぶやき」を見逃さないようにしましょう。

深い学び: 生き方に影響・発展する。生活での見方や考え方、その後の学習への関心、友達など他者とのつながりなど、すぐには表に出てこなくても、遠い将来に発揮される可能性もあります。

3. 協働的探究における教師の役割

教師は、子どもたちに言わせて、聞き合わせ、考えさせる、学びのファシリテーターになるべき。そのために、①言わせる、盛り上げる、意欲を高める。②対立させる、課題を設定させる。③大切な点で立ち止まらせ、考えさせる。④価値付けて、自信をもたせる。を意識しましょう。自分たちでやり遂げたい、やり遂げている、やり遂げたという、感情のストーリー性のある展開を生み出しましょう。

4. 子どもを中心にした授業研究 研究授業は、子どもの「良さ・成長・可能性」が表現されている言動を探す。協議会は自分が発見した子ども(固有名詞を上げて)の具体的な言動(子どもの事実)について、どのような「良さ・成長・可能性」の表れと感じたか、そして「次の支援」について考え合う。

まとめ・自分の言葉で語り、聞き合わせる。

- ・教師は、ファシリテーター、コーディネーター、サポーターとなる。
- ・子どもの気持ちを言わせて、聞いてあげる。
- ・子どもを育てることを目的とした校内研究とする。
- ・子どもについて語り合える同僚性を構築する。一般性のある知識よりも、「友達と分かり合いたい！」という子どもの感情面に重きを置きましょう。その感情を満足させたり答えることができれば、いろんな意欲や自信につながります。そして、学術研究のようなものではなく、子どもらしいやんちゃさが生きると、体を動かすような体験的な実験などを行うと、より良い探究活動になります。

5月中に実態の把握と変容を見取るためのアンケートを実施します。ご協力をお願いします！

先達の言葉

本人 本当 本物 本心 本気 本音
本番 本腰 本質 本性 本覚 本願
本の字のつくものはいい 本の字でいこう
いつでもどこでも 何をやるにも

相田みつを(詩人・書家)

「探究的な学習の在り方に関する研究推進地域事業」の2年目である今年のポイントは、「本物の探究」です。教職員が一丸となり、本腰を入れて本気で取り組まなければ、本心からワクワクするような「本物の探究」にはたどり着けないと思います。本音で語り合い、研究を深めていきましょう！